



10年ぶりのカンボジア(その2)

山本忠文

5. JMAS・PNP オフィスの訪問

25日(火)に懐かしいJMAS・PNPのオフィスを訪問いたしました。

その朝は10時に迎えの車が来る約束でしたので、それまで時間があり前日までの疲れを癒す意味もあってホテルにあるSPAでマッサージを受けることにしました。

マッサージは大きく2種類に分かれ、①疲労回復・活力増進マッサージと②リラクゼーション・アロマセラピーマッサージがありました。値段は、時間により異なりますが大差はなくアロマの方が若干高めといった感じです。呑みすぎで疲れが出ていたので①疲労回復・活力増進マッサージを受けることにしました。1時間15ドルでしたがやや年増の女性が懇切丁寧にもんでくれすっきり疲れが飛んでしまいました。

約束時間にロビーに出ると既にソフィー君が待っていてくれました。車はJMAS・PNPのもので、ライオンズクラブ(LCIF)から寄贈された4Wのパジェロでした。車の助手席に妙齢の女性が同乗しておりましたが、聞いてみると不発弾関連の経理担当とのことでした。

オフィスに到着すると、総務担当(実質的な副代表)の横山氏(男性)以下昔一緒に勤務した懐かしい面々が温かく出迎えてくれ久闊を叙しました。その後、現地代表(既に下番)の佐古氏を表敬、歓談しました。当日は、次期プロジェクトの日本大使館及びCMAC(カンボジア地雷対策センター)との契約・署名式を翌週に控えた超多忙な時期にもかかわらず快く対応していただきました。建物・設備等は殆ど昔のままでしたが屋敷内のマンゴー、ジャックフルーツ等の樹木が雨季のためでしょうか鬱蒼と茂り外から写真を撮ると中の様子が判らないほどでした。



昔は蚊が多く、窓にネットを張ったり、テニスラケットの様な電撃蚊キラーを使ったりしましたが今はその必要がないそうです。今回の旅行で PNP では殆ど蚊を見かけませんでしたので、衛生状況が随分改善してきていると感じました。これもカンボジアの発展の証左でしょう、病気の源である蚊が少なくなることは健康管理上も大いに意義のあることであり大歓迎です。

昼食は私が代表の当時はおかずを数種類ドライバーに買って来てもらい、ご飯はハウスキーパーに電気釜で炊いて貰って、全員でオフィス内のロビーの長テーブルで会食しておりました。今は個人毎に外に出て食べに行ったり、弁当を持参したりと習慣が変わっておりました。折角だから一緒に何処かで会食しようという提案したところ、代表を除き全員が参加してくれました。場所は私が着任当初に 2 か月ほど滞在したホテルに隣接する台湾料理のレストランに設定してくれ、現地に着くと懐かしさが込み上げてまいりました。ラウンドテーブルを 8 名で囲み、炒飯、餃子、野菜炒め、魚料理、肉料理と食べ切れないほどのご馳走でしたが 50 ドルでおつりが来て、その安さに改めてびっくりでした。食べるのと歓談に忙しく写真を撮るのを忘れてしまいました、ご容赦ください。

昼食後は、オフィス周辺がどの様になったのかを確認するため一人で散策しました、オフィスから 50m 位の所にあったビアガーデンも無くなってしまい寂しい限りでした。びっくりしたのは、近くの四つ角に 5 階建てほどのビルが建っていたことで比較的郊外に近い場所にしては立派過ぎる建物でした。看板を見ると「カンボジア技術研究所」とあり、愈々この国もこの様なことに注力するゆとりが出てきたのかと一寸うれしくなりました。



その他、10 年前に良く訪れた近くのプサー（市場）、焼き立ての美味しいフランスパンを買った「パイオン・ベーカリー」、一人で夕食をとりビールを呑んだ小さなレストラン等を見て回りましたが何れも昔と変わらず残っており懐かしさを覚えるとともにほっとした心地がしました。思い出のものが残っているのはうれしいものです。

オフィス周辺の散策を終えてから、佐古代表から最近の JMAS カンボジアの活動について話

を聞くことができました。私が代表の頃は、不発弾に関してはメコン川東岸のベトナム国境に近いスバイリエン、プリベーンと PNP 南部のカンダール、コンポンスプーの 4 つの州で活動しておりました。地雷に関しては、バタンバン州で人力による処理を実施し、途中から機械処理と「安全な村づくり」(SVC) 活動が始まりました。

現在は、タイ国境に近い、北部のバンテアイミアンチェイ州と中央部のコンポントム州の 2 箇所で活動しているとのことで、10 年前に比べると活動範囲が狭くなったようです。振り返ってみると、私がいた頃が一番手広く活動していた様です。

現在の事業は「コンポントム州における地雷・不発弾処理に関連する総合機械処理事業 (PCD)」、「バンテアイミアンチェイ州における地雷・不発弾処理を伴う地域開発促進事業 (PCD)」と同じくバンテアイミアンチェイ州におけるコミュニティ総合開発プロジェクト「安全な村づくり」(SVC) の 3 つであり、従来区分していた不発弾処理と地雷処理を総合的に実施しているそうです。地雷の機械処理については、最近の活動地域では対人地雷ばかりでなく対戦車地雷も敷設されており危険を伴うため、処理機を対人地雷処理の前作業としてのブッシュの伐採に使用していると聞き、地雷処理機も万能ではないことを改めて痛感致しました。



6. キリング・フィールド（チュンエク大量虐殺センター）を訪れて

現地代表時代に過酷な拷問が行われたことで知られる政治犯収容所 S21（トゥール・スレン）を訪れたことがあります。キリング・フィールドは行ったことはありませんでした。キリング・フィールドは、カンボジア国内に300個所以上あるそうですがよく知られているのはPNP 郊外のチュンエクで、これはトゥール・スレンに付属する刑場として造られたものです。ここはPNP 中心部から南西に10 km以上離れており徒歩での移動は難しいので「トゥクトゥク」を利用することにしました。価格交渉の結果、往復20ドル（見学を終えるまで待っていてくれます）で手を打ちました。

カンボジアではポル・ポトが200~300万人を虐殺したと言われていますが、これは内戦での死者を含んでおり、キリング・フィールドで処刑・虐殺されたのは約100万人で、このチュンエクでは2万人が殺されたそうです。

キリング・フィールドの説明に入る前にポル・ポトについて若干のおさらいをしたいと思います。

ポル・ポトとは1975年4月17日にカンボジアで大量虐殺共産革命を起こした中心人物です。彼の一族はカンボジア王室と関係がある家柄でした当時カンボジアには民族主義が台頭しアンコールワットに象徴されるクメール王国の栄光を復活させようという機運が高まっており、彼もこのような雰囲気大きく影響された様です。エリートコースを歩んだポル・ポトは小学校時代、支配階級であるフランス人やベトナム人官僚の子供と一緒に授業を受けました。その後一族のコネを使い奨学金を得てフランスに留学しました。この留学中にポル・ポトは共産主義に傾倒していき毛沢東を崇拜していたそうです。

帰国後に教師となった彼は教師仲間と革命理論を推進します。その後ポル・ポトは、中国の支援を受けて、カンボジアの社会を破壊し純粋な共産主義社会に変えようとして革命を起こしました。国を掌握した後は教師仲間までも断罪してしまいます。ポル・ポトは、教育を受けたことがない農村部の青年で軍隊を組織します。この時代カンボジアでは人口の8割が貧困に喘いでいましたので、その原因は全て都市住民のせいであると青年軍隊を洗脳します。彼は労働者が上に立つ社会の為に都市生活者の財産は没収されるべきだと考えました。全ての人にこれまでの信仰文化を捨てさせ、クメールルージュ「ポル・ポトの軍隊」に服従洗脳しようとしたのです。

1975年にポル・ポトの軍隊がプノンペンに入ります。彼の軍隊はクメールルージュ（赤いクメール）と呼ばれました。クメールとはカンボジアの中心的民族で赤は共産主義を表しています。軍隊はプノンペンを制圧し48時間以内に学校・会社・宗教施設・娯楽施設・病院・工場・警察署を封鎖し市内から全ての人を強制退去させました。わずか3日の間に町から人が消えたと言われています。

そして、ポル・ポトは革命の邪魔になる人々全てを抹殺し始めました。それは自分の家族も

例外ではなかったそうです。

その結果、3年8カ月と20日の間に大量の人々はその犠牲となったのです。これがポル・ポトの大虐殺です。

PNP 市街地は混雑していましたが、それを抜けると後はスムーズに走り 45 分程で目的地に到着しました。

まずは、チケットの購入ですが外国人は6ドルとあり高いと思いましたが、これには日本語音声ガイド代が含まれていました。これがいらない場合は半額の3ドルですが、この装置は必須です。



ゲートを入ると、下の様な掲示板があって、その順路にそって進んで行き、そこでの出来事をガイドランスによって聞くというスタイルでした。

1~19のガイドランスがあり、実際にキリング・フィールドで働いていた人々の証言やトゥール・スレン収容所の職員の証言、ポル・ポト政権時代を生き延びた人の証言など、ここでしか聞けない話を直に聞くことができます。



ここはトラックの駐車場で、毎日 300 人程の人達が搬送され 50~70 人が処刑されたそうです。この施設は壁の高さが 2.5m あり、500m 離れた所に軍事キャンプがあり、壁の外では兵士が脱走者はいないか 24 時間監視していたそうです。



クメールルージュによって輸送されてきた人達は、着いたその夜に一人ずつ処刑されました。時には次の日の夜へ延期されることもあったようですが、その間は粗末な木造の建物で過ごしたそうです。建物は厚い二重の壁で出来ていて窓はありませんでした。1975年4月17日の時点で市内に居た人達を新しい人もしくは4月17日の人々と呼び、クメールルージュの敵として扱ったそうです。罪がない人には「自分はアメリカのCIAだ」等と嘘の供述をさせ死刑を執行していたという話も聞きました。



キリング・フィールドには現在は当時の建物が残っていません、後の人々が建物を壊し資材に使ったそうです。

クメールルージュの処刑の事務管理は細かく、時には事務所で処刑される人自身が事務手続きをさせられたそうです。クメールルージュには洗脳された子供の兵士が沢山おり、処刑を執行していた兵士の平均年齢は17歳だったそうです。



クメールルージュは食事に DDT (我々にも小学生のころ風退治で馴染みがありますね。) を混入させ人々を処刑しようとしてました。食事からは酷い異臭がしていたそうですが、空腹の収容者達は我慢出来ずに食べてしまった様です。食べた人達は直後に墓穴に転がり落ち死にました。更にその上からも DDT が撒かれたそうです。下の写真は、DDT を格納していた小屋 (容器?) との説明出した。



また彼らは銃による処刑はしなかったそうです。理由はコストがかかる為です。処刑は安価

な鎌、斧、ナタ、ハンマー、荷車の車軸という原始的な方法で行われていたそうです。原始的な道具で殺される苦しみを想像すると胸が痛み吐き気がします。下は、実際に使用された処刑器具の写真です



チュンエク大量虐殺センターにはキリングツリーと呼ばれる木があります。この木がキリングツリーと呼ばれるには理由があります。

その理由は、この木に人を打ち付けて殺したという事実です。ここで殺されたのは殆どが若い女性と子供たちだったようです。

カンボジアの女性は元来控えめで、お風呂に入る時や海に入る時も衣服を着用していますが、その習慣を知っているはずのポル・ポト政権下のカンボジア人兵士に殺害される時に、女性は衣服を全て剥ぎ取られ、恥ずかしめを受けた上で虐殺されたようです。

そして、若い母親の前で、子ども（乳幼児）の両足を持ちこのキリングツリーに子どもの頭をぶつけ殺害して穴に落としてから、母親を殺すという残虐な行為まで行っていました。

目の前で子どもを木にぶつけられて殺される母親の気持ちは、果たしてどんなものなのか？想像が付きません。

キリングツリーを最初に見つけた人は、「なぜこの木の幹に血痕や髪の毛、脳みそが付着しているのか不信に思った。でも、その横にある穴を覗いてみるとその理由が全てわかった」と証言しています。



チュンエク大量虐殺センターには、ここで亡くなった全ての人の魂を慰霊する塔があります。

慰霊塔の中には、大量の頭蓋骨が保管されており、中に入って近くで見ることが出来ます。ここに展示されていた頭蓋骨の数の多さには正直かなり動揺しました。こんな大量の頭蓋骨を今まで見たことがなかったし、どのようにして殺されたか考えただけで胸が痛みました。この全ての頭蓋骨が模型ではなく生きていた人間のものだとは実感することができませんでした。

毎年5月20日には慰霊祭が開催されるそうです。



今回、キリング・フィールドを訪れて虐殺の恐ろしさを肌で感じると同時に、普通の人間でも特殊な環境下では残虐になれてしまうのだなと思いました。

兵士達の証言の中で、「革命の反逆者にされて殺されるから。言われた通りのことをするしかなかった」と言うものがありました。

その夜はビアガーデン行きを止めて、近くのレストランでソフィー君と夕食を共にし、生ビールで大虐殺により亡くなられた方々に献杯いたしました。 合掌！

7. メコン川にかかる「つばさ橋」の視察

代表当時、国道 1 号線経由でプリアン州やスバイリエン州の現場視察に何度か参りましたが、メコンが東岸地区に渡るにはカーフェリーしかなくこれがボトルネックでした。

通常は約 4～50 分程度の待ち時間ですが、時には 2～3 時間も待たされることもありました。待っている間に物売り、頼みもしない車拭き(勿論チップ狙い)に悩まされましたのを懐かしく思い出しました。

ここに橋が架かったことを聞き及び、今回の旅行の一つの目的にこの視察を入れ、予めボラさんに案内してくれるようお願いメールを送っておきました。

この場所は、PNP から東に約 60 キロ行ったところにあり、車で 2 時間程度の行程です。

当日は、ボラさんが年次休暇を取り小生の願いに対応してくれました。ドライバーは彼のアシスタントで彼も貴重な年次休暇を消費して務めてくれました。(感謝！)

10 時にホテルに来てくれる約束でしたが、8 時半ころにボラさんから「調印式の準備で事務所に来よう頼まれたので現在作業中です。ホテル到着が遅れ 11 時ころになります。」との電話が入りました。当日はそれしか予定がなかったので、しっかり業務を処理してから大丈夫と伝えましたが、大急ぎで仕事を片付けたようで実際に着いたのは僅か 10 分遅れの 10 時 10 分でした。

国道一号線、はアジアハイウェイ(AH-1)の一部としてホーチミン - プノンペン - バンコクを結ぶ国際幹線道路の指定を受けており、ASEAN 諸国の物流の生命線である「南部経済回廊」の一部であります。

このボトルネックを解消することは、カンボジアの悲願であり、ここに橋が架かれればカンボジアのみならず周辺諸国にとっても大きな恩恵をもたらします。しかしながら、当時のカンボジアの経済・財政事情では困難なため日本に対して橋梁の建設が要請され、日本の無償資金協力によって橋の建設されたものです。

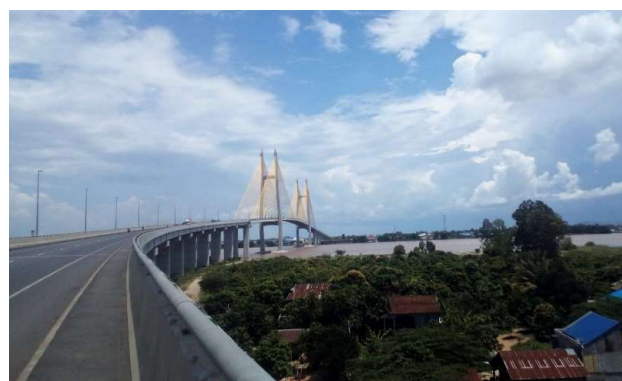
橋梁はネアックルン地区にあるため、建設開始時にはネアックルン橋と呼ばれていましたが完成時には「つばさ橋」(スピエン・ツバサ:スピエンとはクメール語で橋のことです)と命名され、こちらの方がカンボジア国民に広く知られ愛されている呼び名だそうです。

その形状が 2 羽の鳥が翼を広げて手をつないでいるように見えることから「つばさ橋」といわれています。2 羽の鳥は、日本とカンボジアを表し、両国が手を取り合って協力している友好のシンボルです。

架橋の工期は①基本設計:2009年2月~2010年3月、②詳細設計:2010年3月~2010年9月、③施工:2011年1月~2015年3月とのことでした。

途中、川底10mの所から不発弾が発見されCMAC(カンボジア地雷対策センター)が急遽駆け出されてこの処理に当たったそうです。ボラさんのアシスタントは当時CMACに勤務しており、その作業に携わったと教えてくれました。この他にも雨季の豪雨による増水等で作業は難航を極めたと報告されています。

工事は日本の三井住友建設が担当し、同社の報告書によれば、アプローチ橋が東・西側合わせて1500メートル余、アプローチ道路は全長3245メートルで工事総延長にして5460メートルに達する大規模工事となったそうです。因みに日本政府(JICA)の供与額は119.40億円でした。



メコン川左岸には、この完成を記念して立派なモニュメントが建立されており、日本語の説

明もありました。

また、この橋は、カンボジアの 500 リエル紙幣にもデザインされておりカンボジア国民の感謝の気持ち、喜びがよく表れています。



500 リエルの真ん中にも橋が描かれていることに気が付いたでしょうか？

これも日本の ODA で架けられたもので、「きずな橋」といいプノンペンの北東部に 2001 年に完成しました。メコン川に初めて架けられたこの橋の開通によって、農産物の産地である東北地方から首都プノンペンへの交通が劇的に改善しました。現地では日本語の「絆」を表す「スピエン・キズナ」と呼ばれ親しまれています。「きずな橋」は、紙幣だけでなく切手にもなったそうです。



きずな橋

つばさ橋視察後、PNP に向け帰路につきましたが、お昼時を過ぎておりましたので途中で遅昼をとりました。

PNP から 2~30 km 離れた場所でしたが、エアコンの良く聞いた快適なレストランでした。不思議なことに食後、コーヒーを飲みながら歓談中にエアコンが突然切れてしまいました。昼食タイムをやや過ぎていたためでしょうか？店主が中々しっかりしているのか、がめついのか分かりませんが日本ではあり得ない経験をさせてもらいました。

その夜もお決まりのコースでソフィー君も加わりビアガーデンでのディナーを楽しみました。

8. プノンペン最終日、帰国の途に

長かった愈々最終日になり、土産物を買いにセントラルマーケットに出かけることにしました。

その前にもう一度マッサージを受け一週間の疲れを取ることにしました。前回は、疲労回復マッサージでしたので今回はアロマセラピーにしました。セラピストは、前回マッサージをした女性と同じでした。この前終了後に 1 ドルのチップをあげていたので、前回よりも一層丁寧で親切なもてなしを受けました。値段はアロマの方がやや高く、60分で 19 ドルでし

たが29ドルでおつりを呉れたので、そのままチップとして渡しました。

12時に一旦ホテルをチェックアウトし、荷物をフロントに預かってもらいソフィー君のバイクで買い物に出かけました。

セントラルマーケットは、10年前に私が離任した時には大改装の途中で、仮設店舗で営業しておりました。

ここは、何でもそろそろンペン市民の市場で現地の人はプサー・トゥメイ（新しい市場）と呼びお気に入りの場所の一つです。

フランスの統治下、1937年に建てられた黄色いアール・デコ調の建物を中心して、中央のドームから4方向へ放射状に足が伸びており、その中に各種の商店が軒を並べておりあらゆる物を売っています。

中央のドーム部は、主に宝石、貴金属、時計の店がひしめいており、中にはコピー商品、偽物もあるそうですので要注意です。

ドーム外には、同種の店は同じ所にまとまっており買い物客にとっては大変便利です。また、ローカルフードを楽しむことができるお食事処もあります。この日の昼食はここで済ませました。



向け出発しました。

10年前一緒に働いたスタッフ4名（女性2名を含む）と最後の晚餐をしようと約束しておいたのですが、彼らを選んでくれたのは空港への移動経路上にある熊本ラーメンに店でした。

店名は「味千ラーメン」といいます。味千は東南アジアを中心に10か国以上に展開しているようで、カンボジアにも2店舗出店しているそうです。スタッフは見回したところ全員現地人の様でした。5ドル弱の値段で味は日本のものと遜色なく大変美味しく頂きました。マニュアルの整備、訓練がよく行き届いていることに関心致しました。



楽しい歓談の時間もあっという間に過ぎ、2名の女性は帰宅するためここで別れることになりました。

最後にボラさんとソフィー君が空港まで送り届けて、見送ってくれました。

その後、チェックイン、搭乗手続きを済ませ空港内でお茶を飲んだり、軽い買い物をしたりして出発までの期間を過ごしました。

スマホを使用する必要がなくなったので、SIMを日本の物に差し替えて動作確認したところ、これが正しく認識されないため、取り外して再度挿入を使用としましたが中々取り外せませんでした。「小さなドライバーかピンセットでもあれば何とかできるのだが」と思い売店のお兄さんに相談したところ、快く対応してくれましたが適切な工具を持ち合わせておらずクリップを使って格闘して呉れましたがNGでした。あまり商売の邪魔をしてもいけないと思いお礼を言ってクリップを貰い受けて、自分で再チャレンジしましたが結局NGで、正しく差し替えられたのは帰国・帰宅後でした。

歳を取るとせっかちになり、早め、早めにやろうとする悪い癖が抜けておらず結果的に失敗するというダメの見本となりました。（お粗末！）

当日は、台風24号が日本に接近しつつありフライトの遅れ、揺れ最悪の場合は着陸空港の変更もあるかと心配しましたが、到着が30分ほど遅れたのみで心配は杞憂に終わり無事

に日本に帰り着きました。

9. 終わりに

今回は8泊9日（機内泊を含む）をほぼプノンペンで過ごすという皆さんが余りやらないパターンでしたが、冒頭に掲げた目的を十二分に達成して終了することができ実りの多い旅でした。

これ偏に献身的に小生の旅をサポートしてくれた昔の仲間、就中ボラさんとソフィー君のお陰と深く感謝いたしております。

ソフィー君にはほぼ毎日、夜の酒の席まで付き合って貰い「申し訳ない、奥さんや子供さんは大丈夫か？」と謝りましたが、「大丈夫、1週間ですから全面的にサポートします。家内も了解していますから気にしないでください。」と何度も有難い言葉が返ってきました。

ボラさんは、今回中心となって私を支えてくれました。彼は「私の部屋は広すぎるので二つに区切って内装を整えるよう計画しています。今度来る時のホテルは不要です。飛行機代だけで来られますのでなるべく早くお出で下さい。」と嬉しい言葉で泣かせてくれました。

国は違っても人間の心は同じで、何時までも本当の仲間、友として心を通わせることができると確信いたしました。

改めてお二人に衷心より感謝の誠を捧げて私の報告を締めたいと思います。